

青森県立郷土館だより

News from the Aomori Prefectural Museum

通巻137号 平成18年(2006)7月1日 Vol.37 No.2

みて。さわって。うごかして。いっぱいあそぼう！
わくわくたいけんルーム 7月15日オープン！



わくわくたいけんルーム
全景



利用のようす

博物館として後世に残すべきものは、形あるものばかりではありません。郷土“あおもり”に生きてきた人びとの技や知恵や遊びなどもそのひとつです。それらを伝承する場として郷土学習室『わくわくたいけんルーム』が当館3階にこのたびオープンします。ぜひ親子または3世代で来館し、昔の遊びやくらしの工夫、青森県の文化を体験していただきたいと思います。

『わくわくたいけんルーム』には、〈あそぶ〉〈うごかす〉〈さわる〉〈かんさつする〉〈かんがえる〉〈へんしんする〉に分類された約50の体験ボックスがあり、ボックス内の資料を使って自由に体験活動を行うことができます。また、映像資料や図書資料も豊富に用意していますので、自由研究・調べ学習などでの利用もできます。もちろん総合的な学習の時間や社会見学等の学校団体の利用も可能です。

体験プログラムをちょっぴり紹介

- ・けん玉・ぶぐり・おはじき・お手玉・だるま落とし・紙相撲・レコード
- ・ちょうちん・火縄銃・ほら貝・炭火アイロン・土器の模様付け・火起こし
- ・着物を着る・わら靴をはく・土器、石器、化石にさわると木(ひば)のパズルや積み木
- ・植物の観察などなど・・・。まだまだいっぱいあるよ！

体験の仕方は、自分で興味を持った体験ボックスを手に取り、情報カード(体験解説書)に従って体験するだけです。終了後は、また自分で元の場所へ戻してください。インフォメーションカウンターには、解説員と学芸員がおり、体験の補助や調べ学習のお手伝いを行います。利用の仕方や調べ方などご不明なことがありましたらお気軽にお声をかけてください。なつかしさと新鮮な驚きがいっぱい詰まった『わくわくたいけんルーム』。皆様のたくさんのご利用をお待ちしています。

※ 団体利用は、最大で40名まで可能です。各展示室との観覧を組み合わせることにより、それ以上の人数も利用可能です。団体利用を希望する際は、郷土館まで事前に連絡をください。

郷土館 夏休み行事のご案内



郷土館では、夏休みの時期、小・中学生などを対象にして以下の行事を行います。
みなさん、どうぞご参加下さい。

夏休みこどもの国

- インテリアにもなるよ！
すてきな花炭をつくろう！
7月23日(日) 13:30～15:00
受講料：無料
持ち物：軍手・花炭にしたい材料
 - 君も化石博士！
かっこいい化石レプリカを作ろう！
8月6日(日) 13:30～15:00
受講料：100円(当日お持ち下さい。)
持ち物：絵の具用細筆・ぞうきん
- ※ それぞれ定員30名です。定員となり次第締め切りとさせていただきます。

お申し込み・お問い合わせ
TEL 017-777-1585 FAX 017-777-1588

夏休み郷土館クイズラリー

1. 期間：7月15日(土)～8月20日(日)
2. 場所：当館
3. 内容：「みる・さわる・かんがえる」をキーワードに青森県についてのクイズを解いていきます。
成績優秀者には修了証とステキなプレゼントが贈られます。
4. 入館料：小・中学生は無料
5. その他：事前の申し込みはいりません。
※ クイズラリー実施期間中、「ミュージアム探検隊」はお休みです。



自然観察会のお知らせ

夏の自然観察会で海の生物の不思議にふれてみよう！

7月30日(日)、青森市浅虫の海岸で海にすむ生物の観察会を行います。講師は、東北大学附属浅虫海洋生物学研究センターの経塚啓一郎さんです。午前中はセンター周辺の磯を散策し、貝やカニなどの観察を行います。午後はセンター内で海に住む生物を、顕微鏡を使って観察する予定です。

参加費は無料ですが、現地集合となります。また、各自で昼食をご用意ください。参

加を希望される方は、氏名・住所・電話番号をお知らせの上、学芸課の教育普及・広報広聴グループへ電話かFAXでお申し込みください。ホームページからも申し込みができます。申し込みの締め切りは、7月26日(水)です。多くの方の参加をお待ちしております。

お申し込み・お問い合わせ → 017-777-1585

石の記憶ーヒロシマとナガサキ

特別ギャラリートークの模様

4月21日から5月14日まで、東京大学総合博物館の巡回展『石の記憶ーヒロシマ・ナガサキ』が開催されました。今回の特別展では、広島・長崎原爆被害調査の際、渡辺武男教授の手により採集された石や瓦などの被爆試料と、調査記録として保存されている写真・ネガ・書類などが展示されました。

開催初日、特別展会場たがいで田賀井篤平氏(元東京大学総合研究博物館教授)による特別ギャラリートークがありました。

田賀井氏は、冒頭で広島と長崎では建材などに使われる石材の石質が違うことを指摘、続いて、被爆により瞬間的に熱せられた石材の特徴と調査記録について話しました。そのなかで、

展示されている獅子頭については、かつて広島護国神社の狛犬であると伝えられていたが、使用した石材が安山岩であることと長崎で撮影した写真により、長崎浦上天主堂にあった獅子頭と判明した、と説明していました。その他、地質学的手法で解明された爆心点などについて説明しながら展示室を一巡しました。



南米原産のタバコが日本に伝わったのはおよそ400年前といわれています。それ以来、日本では急激に普及していき、現在にいたっています。当初は嗜好品として吸うだけでなく傷薬（血止）、衣服や書籍の虫除けにも利用されたといえます。日本での喫煙方法は葉を刻んでキセルに詰めて吸うのが主流で、現在のような紙巻き煙草が出てくるのは明治時代になってからです。

キセルの先の火皿に細く刻んだタバコを詰め、これに火をつけて数回吸ってから吸い殻を叩いて捨てるものです。つまり、吸うたびに新たに火をつけることとなります。そのための道具として使われたのがタバコ盆でした。

タバコ盆は箱状の入れ物の中に火入れと灰吹きが入っています。火入れは煙草に火をつけるための炭火を入れるもので、灰吹きは灰筒ともいい、吸い殻を捨てるためのものです。現在でいえばライターと灰皿のセットに当たります。タバコ盆には、家庭で普段に使う個人専用

のほか、商家の接客用や人が集まる時に使うものなどがありました。宴会などにはタバコ盆が必要となるため、県内の旧家ではたくさんのタバコ盆を用意していたものでした。

(成田 敏)



タバコ盆

郷土の先人⑬

母子に愛をそそいだ「西洋産婆」 亀徳 しづ(きとく しづ)

1878(明治11)～1966(昭和41) 和歌山県

「西洋産婆」と親しまれた亀徳しづは、東京立教女学校(現立教女学院)を卒業後、キリスト教教師の父松下一郎を手伝うために八戸市に来ました。まもなく結婚、やがて子供もうまれます。しかし、平穏な日々は長く続かず、夫が出奔、幼い二人の子供を抱えたしづは、自立のために職業として「産婆(現 助産師)」の道を志します。当時、出産の多くはトリアゲババと呼ばれる女性たちの手によって行なわれており、医学的な知識や技術の欠如、不衛生な環境によって、母子多くの生命が失われていました。そんな中で産婆となったしづは、自身が経験した妊産婦の苦勞を改善しようと奮闘します。

1906(明治39)年、28歳で八戸市番町に開業、その後、「八戸産婆会」を設立して、地域の産婆たちの間で技術や知識の情報交換を行い、器具の消毒・管理の徹底といった衛生思想の普及と意識の向上に努めました。

母親を励まし、生まれてきた子にも惜しみない愛情をそそいで世話をするしづの評判は高く、当時の新聞は「当中番町なる産婆業亀徳しづ子は開業以来技術経験共に進み常に産婦に対し極めて親切なるより依頼者漸次多きを加へ近

来は殆ど寸暇なき有様なりと云ふ」(奥南新報：明治42(1909)年8月13日)と伝えています。

その劇的な生涯は、芥川賞作家三浦哲郎(八戸市出身：1931～)によって小説化されています(写真)。また、国際的な平和運動家として活躍し、立教大学総長をつとめた松下正寿(1901～1986)は二男です。

(太田原慶子)



『しづ女の生涯』(三浦哲郎著)

1979(昭和54)年 実業之日本社発行
青森県近代文学館所蔵

7月～10月の行事

特別展・企画展等

6月17日(土)～7月2日(日)

世界遺産 高句麗壁画古墳展

7月14日(金)～8月27日(日)

おがわら湖の自然史

9月15日(金)～11月5日(日)

わが家にテレビがやってきた

—昭和30年代以降のくらしの変遷をたどる—

夏休み企画

7月23日(日)・8月6日(日)

夏休みこどもの国 (→P2)

7月15日(土)～8月20日(日)

郷土館クイズラリー (→P2)

自然観察会

7月30日(日) 場所：青森市浅虫 (→P2)

※ 休館日

7月7日(金), 8月28日(月), 9月1日(金)～5日(火),

9月11日(月)

土曜セミナー

7月 1日 小川原湖周辺の植物 神 真波

7月 8日 津軽西浜ニシン漁の移り変わり

森山 嘉蔵 氏

7月15日 青森周辺の近世漁業史 坂本 寿夫

7月22日 青森県絵馬散歩

7月29日 青森県の鉄道 佐藤 良宣

8月 5日 ソウとクジラ 島口 天

8月12日 大衆魚(多獲性魚類)1 サバ類

石戸 芳男 氏

8月19日 白山山地の昆虫をどうして調べたか。

山内 智

8月26日 コケの話 柿崎 敬一 氏

9月 9日 日本刀講座—日本刀の歴史と日本刀鍛冶—

富岡 昭 氏

9月16日 イザベラ・バード「日本奥地紀行」(2)

成田 敏

9月23日 東岳の植物 葛谷 孝 氏

9月30日 戦国期の津軽の村と村人

工藤 弘樹

10月 7日 (テーマ未定)

10月14日 縄文の海と生業なりわい 市川 金丸 氏

10月21日 (テーマ未定)

10月28日 伝統的な葬送儀礼 長谷川 方子 氏

企画展 おがわら湖の自然史



7月14日(金)から開催の本企画展は、当館自然分野が平成12年度から5ヶ年計画で実施した「小川原湖自然調査」の成果を

中心に、小川原湖周辺の変化に富んだ自然環境について紹介するものです。自然調査は地質、植物、動物について実施し、ラムサール登録地「仏沼」では日本初記録となるウンモンクロマダラヒメハマキという蛾や、近年まで絶滅したと考えられていたヒンジモという水生植物が確認できるなど、様々な成果が得られています。本企画展を通して、青森県最大の湖「小川原湖」の成り立ちや自然環境について理解を深めていただきたいと思います。

会期は8月27日(日)までです。会期中に休館日はありません。

特別展 わが家にテレビがやってきた

—昭和30年代以降のくらしの変遷をたどる—

昭和31年度の『経済白書』では「もはや戦後ではない」というキャッチフレーズが使われました。これは第二次



世界大戦後の経済復興が完了したことを意味する言葉でした。そして白黒テレビ・洗濯機・冷蔵庫、いわゆる「三種の神器」といわれた家庭用電気製品の普及をはじめとする消費ブームがやってきました。オート三輪、テレビのヒーロー、駄菓子屋、フラフープ等々は、「団塊の世代」にとってはとりわけ懐かしく思われることでしょう。昭和30年代は、多くの国民が明日に希望を持ち、輝いていた時代でした。生活水準の向上とともに国民のライフスタイルが大きく変化した高度経済成長時代を懐かしい多くの資料で紹介します。

総合博物館 青森県立郷土館だより Vol. 37 No. 2 通巻137号 2006. 7. 1

編集・発行 総合博物館 青森県立郷土館

〒030-0802 青森市本町二丁目8-14 TEL (017) 777-1585(代)

ホームページ <http://www.pref.aomori.lg.jp/kyodokan/>

